

Ⅲ章 各教科の取り組み

国 語 科

1 育成したい「思考力」

- a 論理的思考力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，既成の秩序の中で吟味する力
- b 想像力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，五感を通して得てきた知識や経験と結んで創造する力
- c 言語感覚：ことばの使い方の正誤，適否，美醜等について，直感的・感覚的に捉える力

a 「論理的思考力」とは

○ ことばとそれが指し示す意味において

そのことばの整合性を熟考・評価することである。例えば「もうどう犬の訓練」（東京書籍3年下）では、「『いっしょに町を歩く練習をします。』と，1か所だけ『練習』ということばが使われているが，これは訓練ではないのか。」「練習ということばには，訓練とは違った意味があるのか。」と，自分の経験と照らし合わせながら，ことばとそれが指し示す意味の整合性について吟味する思考である。

○ ことばとことばの関係において

文のねじれ，順序，主張と根拠の整合性等，語や文，構造の整合性について熟考・評価することである。形式論理（帰納論理，演繹論理）は，このレベルの思考に含まれる。

○ ことばとその使用者において

そのことばの使用者の意図を捉え，その整合性について熟考・評価することである。「森林のおくりもの」（東京書籍5年下）には，木が長生きであることを述べている部分がある。その部分について，「筆者が，読み手のよく知っている例を挙げているのは，読み手の納得を得ようとしているからだ。」等，筆者の意図について吟味することが，このレベルでの思考である。

b 「想像力」とは

○ ことばとそれが指し示す意味において

一語・一文を経験とつなぎながら読み取ることである。「かさこじぞう」（東京書籍2年下）に「じいさまは，ぬれてつめたいじぞうさまのかたやらせなやらをなでました。」という叙述がある。その一文から「じぞうさまは石でできているから，さわると，きっと氷のように冷たいよ。」「ぼくは，『じぞうさま，こんなにつめたくなってつらかりうにのう。』と，じいさまがじぞうさまを思う気持ちを考えたよ。」等と，様子や気持ちを思い描くのがこの思考である。

○ ことばとことばの関係において

類似していることばや対比的なことばの関係を讀んだり，文脈とことばの関係を捉えたりすることである。「注文の多い料理店」（東京書籍5年下）には，「金文字→水色の戸→黄色な字→赤い字→黒い戸」のように色が象徴的に用いられている。これらを比較してその意味を考えたり，紳士の心情の変化と重ねて捉えたりするのもこの思考である。

○ ことばとその使用者において

ことばを根拠に，物語の主題や，書き手・話し手の意図等をつかみ，自分の考えをつくり上げていくことである。

c 「言語感覚」とは

○ 正誤……語の使い方や文の組み立て方について，言語規範に合っているか否かを直感的に判断・評価する能力。

○ 適否……物事を適切に言い表しているか，場や相手にふさわしい表現か等，表現の妥当性や効果を直感的に判断・評価する能力。

○ 美醜等…美しい・汚い，明るい・暗い，固い・柔らかい，重い・軽い等，あるいは軽快，重厚，優美，勇壮等，表現の微妙なニュアンスを直感的に判断・評価したり感覚的に味わったりする能力。

2 「思考力」を育成するための思考様式

(1) 思考様式の分類

		論理的思考力	想像力	
		「話すこと・聞くこと」「書くこと」	「読むこと」	
			主に 説明的な文章	主に 文学的な文章
ことばとそれが指し示す意味		<p>1年「きいてきて」 分かりやすく説明する際、「色」「形」「大きさ」「数」「手ざわり」「音」「思ったこと」等の視点をもつ</p> <p>1年「きいてきて」 詳しく話す際、「似たものと比べて言う」「理由を言う」</p> <p>2年「ビーバーの大工事」 読む相手が分かることばを使って書く</p> <p>2年「ビーバーの大工事」 説明にあった絵を考える</p> <p>3年「出来事をつたえよう」 いつ・どこで・だれが・どんなといったことを落とさずに書く</p>	<p>1年「どうぶつのはな」 写真とつないで考える</p>	<p>1年「サラダでげんき」 どんな場面か考える時には「だれが」「どうしたのか」を見つける</p> <p>1年「サラダでげんき」 どんな順に来たかを考える時には、場面の始めに誰が来たかに目を付ける</p> <p>1年「はるのゆきだるま」 想像したことをことばとつなぐ</p>
	ことばとことばの関係	<p>1年「どうぶつのはな」 自分が一番おもしろいと思った部分を選ぶ</p> <p>1年「どうぶつのはな」 その動きをよく見る、生き物になって動いてみる</p> <p>2年「教えてあげる、たからもの」 絵と話す内容が合っているかを考える</p> <p>2年「教えてあげる、たからもの」 絵の順番と話すことの順序が合っているかを考える</p> <p>2年「まよい犬をさがせ」 物事を説明する際には、全体から部分への順で行う</p> <p>2年「たんぼぼ」 伝えたいことに必要なことを書く</p>	<p>3年「自然のかくし絵」 中心文を見付ける際には4つの関係から見ればよい <同じ関係> 中心文はまとめている方「このように」 <反対の関係> 中心文は後ろの方「しかし」「ところが」 <わけの関係> 中心文は意見の方「だから」 <別の関係> 中心文は両方「そして」「それに」</p> <p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 問いの段落を構成する</p> <p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 読者の疑問に答える段落を構成する</p> <p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 中心文が他の段落をまとめているかどうか確かめる</p> <p>6年「言葉の意味を追って」 ○主張に合った根拠を挙げる ○根拠はまとまりごとに挙げていく ○根拠は、順番に挙げていく ○2つのことを主張するなら、それぞれの主張の根拠を書く</p>	<p>2年「かさこじぞう」 これまでの様子や気持ちと重ねて想像する</p> <p>3年「ゆうすげ村の小さな旅館」 2人の立場から物語を読み取る</p> <p>3年「木かげにごろり」 前後の場面で状況を変化させていることばに着目する</p> <p>3年「サーカスのライオン」 始まりの場面と比べて、中心人物の行動や気持ちが大きく変わる場面を見つける</p> <p>3年「サーカスのライオン」 いろいろなことばを結び付けながら気持ちを想像する</p> <p>5年「注文の多い料理店」 オノマトペ、色彩語から人物像を想像する</p> <p>5年「注文の多い料理店」 (主題読みのために)始めと終わりの人物の変化やその原因を図で表す</p>
ことばとその使用者		<p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 話題提示の部分を、共生の特徴となるような動きや生活の様子について、読み手を引きつけるように書く</p> <p>5年「自分の考えを伝えるスピーチをしよう」 主張の理由→反論の組み立てにする</p>		

※ これらの思考様式は、実践の一部であり、全てを掲載しているものではありません。

(2) 分類から明らかになったこと ～思考様式を設定する際、大切にしたい視点～

これまでの実践で有効性を認められた思考様式を、国語科で育成したい「思考力」に基づいて分類した結果、思考様式設定に際して大切にしたい「視点」が以下のように明らかになった。

① 発達段階を考慮した思考対象（ことばとそれが指し示す意味、ことばとことば、ことばとその使用者）の設定

ことばの習得段階にある低学年の子どもたちに、一つ一つのことばにこだわり、意味を正しく理解したり自分の伝えたいことを正しく表現したりする力を育てることはとても大切である。そのため、主に、低学年では**ことばとそれが指し示す意味**について思考するための思考様式を設定している。

中学年から高学年にかけては、ことばとことば、文と文、段落と段落を関係付けながら書かれている内容を深く読み取っていくことができるようになってくる。そこで、**ことばとことばの関係**について思考するための思考様式を設定している。

さらに、高学年の子どもたちは常に他者を意識し、他者と自分とのかかわりの中で物事を判断したり、他者と自分とのものの捉え方、考え方の違いを大切にしながら新しい考えを生み出していこうとすることができる時期にある。ことばに込められた他者の思いを汲み取ろうとするだけでなく、自分自身もまたことばに自分の思いを託して相手に伝えようとすることができる。そこで、高学年では**ことばとその使用者**について思考するための思考様式を設定している。

このように、発達段階に応じて中心となる思考対象が絞られてくる。言い換えれば、子どもたちの成長段階を十分に見極め、身に付けなければならない力を明確にし、着実に身に付かせていかなければならないということである。

② 領域間の関連を見据えた思考様式の設定

思考様式の分類表を横に見たとき、領域間の関連が明らかになってきた。特に、「話すこと」「書くこと」には共通する思考様式が多数見られたため、まとめて表に位置付けることにした。また、「話すこと」「聞くこと」と「読むこと(説明的な文章)」との関連も深い。

思考様式を設定する際には、それがどの領域のどの教材と関連があるのかを考え、活用の場を設定しておくことで、より確実に身に付けることができる。

③ 同領域・同思考対象内の系統性を見据えた思考様式の設定

②で述べたように、領域間の関連を図ることによって同じ思考様式を繰り返し使い、確実に身に付けることができる。同思考対象内での思考様式を見ると、繰り返されながらも新しい視点が加わっている。

例えば、説明的な文章を基にことばとことばの関係について思考する際の思考様式として、3年「自然のかくし絵」では、中心文を見つけるための思考様式を身に付け、4年生「ヤドカリとイソギンチャク」では、中心文を見つけ、さらにその中心文が他の段落をまとめているかどうかを確かめるといった思考様式を身に付けていく。

それぞれの思考様式の特徴や違いを明確にすることで、思考様式の系統性が明確になる可能性がある。